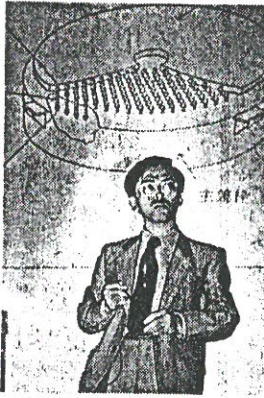


光の研究で宇宙知る

静岡
'91.
11.10

浜松でコン
ファレンス 講演やハイテク実演



「宇宙を見る」のテーマで講演する国立天文台の家助教教授＝浜松市福祉文化会館で

「光（ひかり）」をテーマにした「第八回浜松コンファレンス」（同実行委員会主催、浜松ポトニクス、生体計測委員会協力）が九日、浜松市成子町の市福祉文化会館で開かれた。国立天文台の家助教教授が

授が「宇宙を見る」の演題で講演するなど、光、宇宙、空間とハイテク技術のかかわりについて考えた。家助教教授は、観測装置の発展を主とした宇宙研究の進化に伴い、宇宙の存在の認識が変わりつつある点を指摘し、「今の宇宙の大きさや膨張速度は観測できるまでになった。可視光、赤外線など波長の違う電磁波で観測することが大切。それによって見え方が変わっ

てくる」などと宇宙観測の基本と現状を説明した。

望遠鏡の変遷についても触れ、「現在、ハワイで世界最大の八咫望遠鏡建設が始まっている。ハイテク技術を駆使した通称すばる望遠鏡が完成すれば、宇宙の解明は一步前進する」と述べた。

この後、スピーカーを直方体の八つの角に設置し、特殊な収録・再生システムで自然の音を再現する試みがされ、最後に浜松ポトニクスと「宇宙と光」のテーマで講演した。書局社長は先端技術の宇宙観測に与える影響について話し、「特に、光は理論解明の上で重要な位置を占める。光の研究を進めていくことは、宇宙を知ることにつながる」と強調した。